



# 人は水辺に向かう。

## 川辺と海辺の薫風と穏やかな時間を求めて

かつて「水辺」は人が暮らすうえで欠かせない領域だった。漁業、舟運の拠点であり、稲作を支え、何よりも生命の糧となる生活水の、まさしく源泉だった。そこに暮らしが生まれ、産業が興り、経済活動が始まった。

河川の氾濫や海洋の高波の懸念がある水辺にも人々の生活が営まれるようになり、人は水を治め、鎮めるために様々な工夫を凝らす。水辺を管理し日々の生活を維持することは日常の安心と安全を約束する大前提となった。その一方で危険を回避するために人と水際のつながりは希薄になり、水辺は人にとって近くて遠い存在になってしまった。

そして今、人は水辺に回帰しようとしている。心と体を癒し、人間らしさを回復する水辺の力とその大切さに気づき、水辺を取り戻そうとする人々の声を聞いた。薫風が吹き渡る季節。改めて豊かな時間と空気が満ちる川と海の水辺に目を向けてみたい。



汐浜テラス

東西線東陽町駅から徒歩5分ほど、工業専用地域の運河沿いに位置し、近隣住民や働く人々が憩える場所として整備された汐浜テラス。コンテナカフェやイベントを通じて地域コミュニティの活性化を図り、自然と触れ合える場を提供している



# 新しい水辺活用の可能性

## 水辺を使いこなす ミズベリング

一度は水辺に背を向けた街並みが、近年、都市の再開発などにより、川や水辺を生かした街のシンボルとなる空間を形成する動きがある。そうした認識のもと国土交通省は二〇一三年に「ミズベリング・プロジェクト」を立ち上げ水辺の利活用を支援してきた。同年に「水とまちのソーシャルデザイン懇談会」において「まちにある川や水辺空間の賢い利用」「民間企業等の民間活力の積極的な参画」「市民や企業を巻き込んだソーシャルデザイン」という三つのコンセプトが示され、その具現化に向けてミズベリングが加速した。

その語源は「水辺+RING（輪）」、「水辺+R（リノベーション）+ING（進行形）」。「水辺を徹底的に活用する社会を目指し、国は全国の水辺のPRや水辺改善のためのヒントを提供、市民と行政のキーマンとの橋渡しを行う」「ミズベリング〇〇会議」のサポートなど多彩なプロジェクトを展開している。

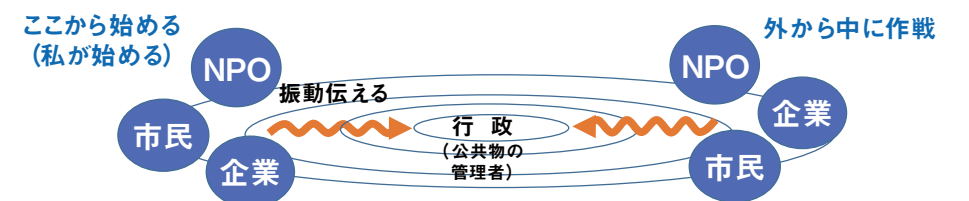
性に着目したのは更に時を遡った学生時代のことだったという。

## 水辺の環境全体を 建築の視点で捉える

早稲田大学で建築学を修める学生時代、岩本氏は意中の女性をデートに誘おうと目論むが、高級レストランに足を運ぶことは性に合わず、お金もない。東京都内で散策に相応しい穴場を探しまくって見つけたのが東京湾の水辺。釣り人たちがフェンスの隙間を潜り抜けて辿り着くようなロケーションだった。「その水辺に佇んで水面の揺らぎを見ているだけで会話がなくても関係が成立するように感じました。人と人のつながりに水の波長が同期するような感覚。私の勝手な幻想だったのかもしれないが素敵だな」と言って岩本氏は笑う。

この水辺をもっと活用することができないのではないか。なぜフェンスで閉ざしてしまうのか。ここにカフェや展望台があれば、もっと水辺を楽しむことができるはずだ。建築の目線で考えると水辺のポテンシャル

## ミズベリングとは？



水辺の利用者を増やし、水辺を徹底的に活用する運動。これまで水辺に関心のなかった人々や事業者が、自由な発想で語り合い、主体的に新たな水辺活用にチャレンジする官民一体のプロジェクト(出典：国土交通省 <https://www.mlit.go.jp/toshi/content/001469764.pdf>)

ど広範な取組みを行ってきた。全国各地で官民が手を携えた自律的なムーブメントが広がっている。

ミズベリング・プロジェクトのディレクターを務める岩本唯史氏にお話を伺った。自ら(株)水辺総研を率い、水辺の価値創造や公共空間利活用の促進事業などにも精力的に参画。「日本一水辺が大好きな建築家」を自称する。「ミズベリングが始まる以前から河川エリアの重要性が認識され始め、川辺の利活用は都市戦略として位置付けられるようになっていきます。それを具体的な活動にしようとするのがミズベリング。それまでの規制一辺倒だった河川を水辺の価値を見出す機会として提供したいと国が謳った。画期的なことでした」。

しかし、岩本氏が「水辺」の可能性

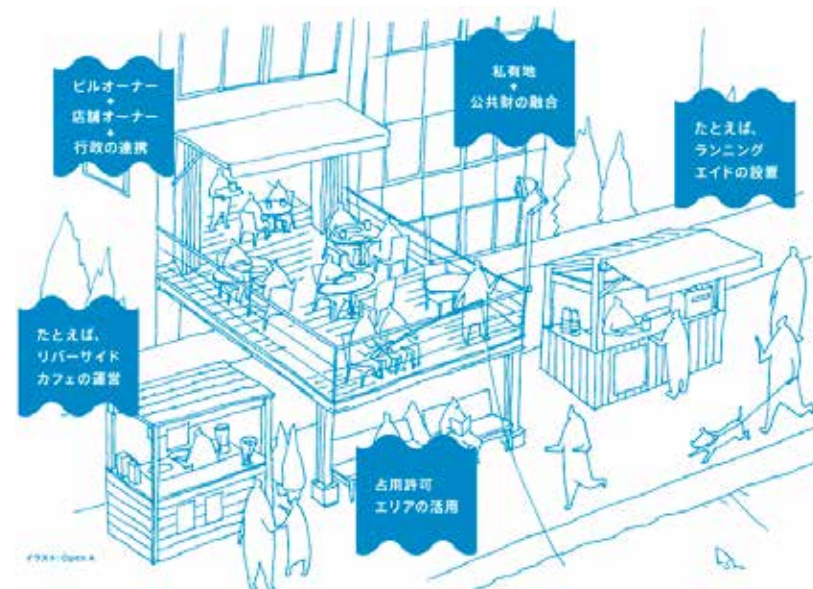


株式会社水辺総研  
代表取締役／一級建築士  
岩本 唯史 Tadashi Iwamoto

ルはとても高いと直感した。

時をほぼ同じくして一九九七年の河川法の改正では、国が整備基本方針のなかに河川の整備と保全にあたって「流水の清潔の保持、景觀、動植物の生息地又は生育地の状況、人と河川の豊かな触れ合いの確保等を総合的に考慮すること」と明記した。「それまでの治水、利水という整備目的に加えて自然環境、ひいては社会環境の保全にまで法律が言及した。デートの時に水辺の寒さをしのぐレストランがあるということも、社会環境の一端と言えるでしょう。まさにハード整備、建築の話だと。法改正で自分が予感する建築のあり方が示されたようで感動しました」と岩本氏は話す。

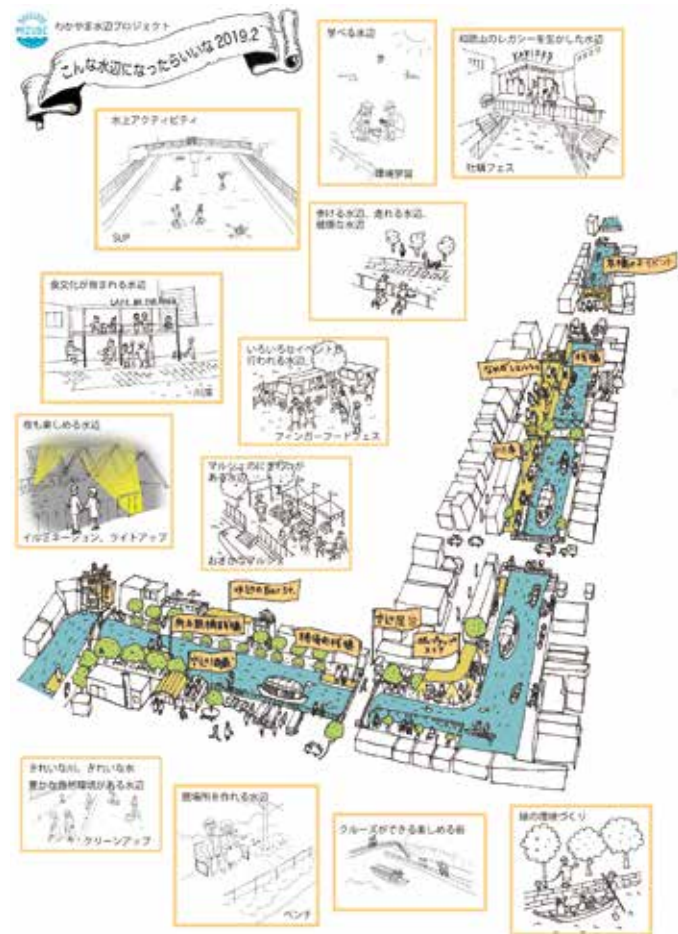
二〇〇〇年に岩本氏はドイツのワイマールに留学する。欧州には各地の文化、アイデンティティの確立を目的とする欧州文化都市制度があり、この制度のもと文



水害対策だけでなく、水辺の美しいまちづくりを目指して規制緩和が進んでいる。カフェを開いたり、イベントやコンサートを開催したりと水辺利用の可能性は広がっている



水辺総研がビジョンメイキングを手掛けた和歌山市の水辺プロジェクト。市内を流れる市堀川再生を通じて市街地の活性化を目指し、社会実験を実施。水辺の駐車場を広場に変え、飲食店事業者によるコンセッションや、多様な実験を行い、まちの魅力向上を図っている



た。冷たい関係ではなく血の通った官民の連携が深化していると感じます」。

港湾に関しても海辺を「使いこなす」施策が急速に進展している。世界に開かれた港湾は河川よりもハードルが高い。しかし、物流機能の高度化とともにコンテナターミナルが整備され、かつての岸壁、波止場はその使命を終えようとしている。それでも海辺の大きな可能性を市民、行政が認識するようになった。「行政も文明開化の頃に開かれた港が当時のままの存在意義を有しているとは考えていません。ある港湾事務所の所長との対話で、新たな港の使い方を考える際に市民がかかわること、港は間違いなく変わっていくと熱く語っておられた。

## 竹芝

周辺にある浜離宮恩賜庭園や隅田川の自然環境を生かし、生物多様性に触れるエコツアー、水上映画鑑賞、水辺バーベキューなどを実験的に実施。竹芝のブランディングにも貢献している



撮影：滝澤恭平



## DNAに刷り込まれた水辺への欲求

ミズベリングは文字通り現在進行形でその輪を広げ続けている。

国の目線が市民と同じ地平にあることに衝撃を受けました」と岩本氏は話す。かつて竹槍を構えて交渉に臨んだ相手との対話は、今や共感に満ちたものになっているという。ミズベリングは水辺に対する双方の意識の変遷を象徴する活動と言える。

な要素を自分たちの手でつくり出そうとしていた。街のあり方に真剣に向き合っていました。日本は建築では負けていないが、街の使い方、水辺の生かし方で明らかに遅れを取っている印象がありました」。

これから建築家としてどうあるべきかを自問する時期でもあった。誰もがスーパースターと言われる建築家を目指し、建築物の機能や意匠で社会を変えていこうとする志を持ってはいた。しかし、もはやそういう時代ではないのかもしれないと岩本氏は気付く。「建築物を造るだけでは社会は変わらない。インフラや公共の空間全体で、建築という職能を発揮できないかと考えるようになったんです。その空間にどのように人間が関与するのか、どう使われ続けるのか、その過程に建築家としてかわりたい。その主たるフィールドの一つが水辺でした」。

かつては学生時代にデイトスポットを探索し、市民が自律的に創造するワイマールの水辺に触れた岩本氏。そして今、既成概念に囚われない水辺を舞台とした新しい建築家像を構築し続けている。

一一年間の活動を通して、今後、どのように進化していくべきなのか岩本氏に尋ねてみた。「その答えは皆さんのなかにあると考えています。行政と市民の目線が合い、規制緩和もなされている。仕組みも構築されていますから、あとは皆さんのなかにある『こんな水辺をつくりたい』という気持ちをもとに表明して、カタチにしていくか。我々を含めて、かわる人がその希望と責任を担っていく時代になったということです」。

## 水辺を舞台とする血の通った官民の連携

日本では、恒例の地域の祭りや神輿を担ごうとするだけで、道路交通法などの規制がかかる。市民の安全を担保するためにも、合理的な法規制は必要だ。人口が増えて、かつて暴れ川と言われていた河川エリアにも人が住み始める。暮らしの安全を約束するために河川は厳格な管理の対象となり、規制の対象とされてきた。水辺から人が離れてしまった背景には、この都市化があると岩本氏は考えている。水辺で賑わいを創出しようと理想主義に燃えていた頃、川や海の水辺においてその使用許可を得ることは難しかった。イベント開催などに向けて、竹槍を持って行政と対峙するような時代もあったと笑う。「今やあらゆる社会基盤が整備され、そのインフラを造ることから、使いこなそうとする時代になり、行政や河川管理者の意識が劇的に変わっています。水辺から都市の賑わいを創出する。水辺を使い尽くす。そのためには行政と市民が双方の協働は必要だと気付い

コロナ禍では、癒しを求めて川沿いを散策する人が多く見られた。水辺に触れたいという欲求は、根源的なものとして人のDNAに刷り込まれている。人が水辺から離れて暮らすようになったのは、ここ百年ほどのことだ。水との付き合い方を改めて取り戻そうとして、人は川辺に、海に向かうのだろうと岩本氏は話す。「人間は社会的である前に動物的な存在。そうしたことを深く再確認する場所が、もしかしたら『水辺』なのかもしれませんね」。

都会の真ん中にある豊かな水辺

水辺アウトドアラウンジ

# 信濃川やすらぎ堤



川のせせらぎとともにゆったりとした時間が過ぎる

大都市新潟のミズベリング

これまで日本の河川管理は、自治体をはじめ公的機関が限定的に担ってきた。一方で貴重な水辺を観光や経済振興の資源として捉え、その地域ならではの市民に開かれた水辺を目指す法整備もなされている。二〇二一年、河川敷地占用許可準則の改正もその一つだ。この規制緩和により、民間事業者が全国の河川で飲食店やオープンカフェ、広告活動などを行うことが可能になる。各地でミズベリング・プロジェクトが始動する契機ともなった。

新潟市は二〇〇〇年代初頭から、信濃川に架かる萬代橋のたもとで川辺から賑わいを創出する取組みに着手。二〇〇三年の萬代橋誕生祭でのオープンカフェを皮切りに、カヌー体験やワークショップなどのイベントを試行していた。舞台は萬代橋から八千代橋、信濃川水門までの約四・五キロ、防災に加え豊かな水辺環境の創造を目的として北陸地方整備局信濃川下流河川事務所が整備した「やすらぎ堤」だ。

二〇一五年に同事務所が「ミズベ

た。焚火を囲んで食事を楽しめる「TAKIBIラウンジ」や実際に街中でキャンプを体験できる「水辺体験CAMP」などアクティブなイベントを用意。SUP体験や水遊びができるウォータープールなども人気を集めた。キッチンカーをはじめ飲食店も多く出店する。イタリアンから台湾料理、もちろんBBQまで、ビールと川風が心と体を癒してくれる。「アウトドアミーティングでは事務局がウッドデッキに椅子、タープなどを用意して企業の皆さんに屋外会議の場を提供しました。会議の後にビールやヨガ体験を楽しむ。ミーティングに限らずアイデア次第で好きなように使っていた。とても好評でした」と高野氏は話す。

昨年の様子を写真で見ると青空のもとタープで寛ぐ家族連れ、大型の簡易プールではしゃぐ子どもたち、萬代橋に沈む夕日を背景にビールとBBQを楽しむグループなど、川面に吹き渡る風を全身に感じながら、水辺の豊かさを堪能する贅沢な時間がやすらぎ堤に流れていることが伝わってくる。

研究会と連携しながら、事務局として多彩なミズベリングのイベントを開催、支援してきた。

信濃川のほとりで

会議、BBQ、キャンプ体験

スノーピークのアドバイザースタッフとしてミズベリングを担当する高野祥平氏にお話を伺った。ミズベリングに参画するようになった経緯をこう振り返ってくれた。「市街にもかかわらず、しっかりと自然の

豊かさを感じることができるのがやすらぎ堤です。恵まれた水辺が都会のなかにあることはとても珍しい。この自然環境を使って新潟市を盛り上げていくことができればスノーピークが手を挙げたのがきっかけでした」。

既に新潟市の夏の風物詩となりつつある、六月から九月開催の「水辺アウトドアラウンジ」がメインイベントだ。昨年も自社で取り扱うテーブルやチェア、タープテントなどを使得ってキャンプシーンを演出し

リング信濃川やすらぎ堤会議」を開催、正式にミズベリング・プロジェクトへの参加を表明する。新潟市も「ミズベリングやすらぎ堤研究会」などを設置し、当該エリアの利用促進、回遊性の向上と魅力の創出に向けた取組みを加速させた。市は飲食店や売店などの営業活動をマネジメントする事業者を公募型で募集し、二〇一六年にアウトドアツール、キャンプ用品大手の(株)スノーピークが選定され、新潟市と協定を締結する。同社は翌年から新潟市や



屋外朝ヨガレッスン。さわやかな風を感じながら、心も体もリフレッシュできる



飲食店も出だし、おつまみから本格的な肉料理まで、水辺を眺めながら様々な料理を味わえる



SUP（スタンドアップパドルボード）の体験教室。やすらぎ堤は川の流れが穏やかで波もないため、初心者でも安心して楽しめる

## 水辺の可能性に「蓋」をしない

やすらぎ堤一帯の整備は河川管理者である信濃川下流河川事務所が担っている。占用主体は新潟市で、マネジメント事業者のスノーピークが事務局としてミズベリング・プロジェクトの実質的な運営を担当する。常設の飲食店やキッチンカー、イベント出店者との調整、PR活動などは事務局の仕事だ。スノーピークは自己資金に加え、常設店からの出店料などで事業資金を確保している。新潟市もこれまでに仮設トイレの設置や活用区域の除草、広報活動などでミズベリングと連携してきた。

更に、イベント実施の申請などに関して新潟市が事務局と信濃川下流河川事務所を仲介するスキームが構築されている。「河川事務所に對する申請業務や環境設備の管理などを新潟市が代行してくださるので、事務局は運営に人的資源を集中させることができます。そのおかげでかなり円滑に開催が継続できるようになっている。外部から視察に来

られる方からそうした行政の支援がうらやましいと聞いたこともあります」と高野氏は行政に対する謝意を述べる。官民の距離の近さ、強固な連携がミズベリングの継続的な展開を支えている。

しかし、昨年は天候の影響もあり、かつて一億円ほどあった売上げが前年比で三割余り減少した。来客数も同様の割合で減っている。「昨年の実績はとても厳しかった。コロナ禍を経て夏場のレジャーが多様化、分散化した影響があると思います。イベント自体も定着する反面、マンネリ化という課題もあるのかもしれない」。

高野氏は結果を分析し次のアクションにつなげたいと考えてい

る。昨年は愛犬とともにミズベリングを楽しめる仕掛けを思いついた。「ドッグランのようなイベントができないかと。関連のある事業者や店舗に相談に行きました。とても興味を持っていただき手応えはあったのですが、安全なエリアの確保や衛生管理の課題があり実施は難しかった。それでも可能性に蓋をせず、自ら発想して動いてみるのが大事だと実感しました」。行動に移さないことには、どこにどのような「蓋」があるのかもわからない。使用許可や調整作業のハードルは低くはないが、そうしたチャレンジは続けていくと高野氏は話す。

## 水辺の自然を非日常と日常を超えて体感する

「人生に、野遊びを。」が、スノーピークのコーポレートメッセージだ。キャンプ用品の開発や販売を通して自然と触れ合うことの楽しさを伝え、「自然と人、人と人をつなぐ」をモットーとしてきた。まさにミズベリングのコンセプトに合致する。しかし、高野氏は同社に就職す

るまで野外キャンプの経験はなかったと明かす。新潟市よりも少し北の山中、田舎の出身で自然が身近過ぎてあえてキャンプをする必要がなかったと笑う。「家の裏手が既にキャンプ場のようなものでした。友達と川や森で毎日遊んでいた。その記憶が私のなかに確かに残っています。信濃川はその雄大さが桁違いですが、そこで自然に触れることで、大好きだった川遊びを思い起こすことができる。都会にあっても自然と触れ合える環境は大切にしてほしいと思っています」。

これまでかかわってきたミズベリングの活動で印象に残っているのは、子どもたちや家族の笑顔だという。高野氏の前職は保育士。子どもが自然と触れ合うことの大切さを日々感じていた。子どもたちは未来を築く存在、彼らに自然の大切さを知ってほしいとこう話す。「ワーッと声を上げながら、川辺を駆け回っている子どもたちの姿を見ると嬉しくなります。森のなかの小鳥の声や川辺を吹き渡る風が私の原点にもなっています。都会でもそうした自然を体感することはできます。やすらぎ

堤でご飯を食べた、水遊びを楽しんだ、そうしたことを大人になって思い出してもらえることが理想だと考えています」。

ミズベリングの活動が市民と川の距離を近くしていることは確かだ。ステージを設置してコンサートが開催されたり、やすらぎ堤で結婚式を挙げる市民も現れた。やすらぎ堤によつて信濃川、萬代橋が新潟市のシンボルだと再認識されつつある。そうした日常性を高めていきたいと高野氏は考えている。「休日に今日はどこかで食事をしようと思いついた時にファミレスに加えてやすらぎ堤が一つの選択肢になればミズベリングは成功したと言えるかもしれません。夏場のイベントは特別なものだとしても、その非日常と日常の両方でこの空間を楽しんでいただきたいと願っています」。

やすらぎ堤は風の通り道でもあると高野氏は話す。三〇〇呎を超える萬代橋から信濃川を吹き抜ける涼風は都会の猛暑を一瞬忘れさせてくれる。今年も暑い夏が巡ってくる。新潟の水辺の空間と風が心と体を癒してくれるに違いない。



小学生までを対象に開催したキッズウォーターパークで、夏休みの思い出もサポート



水辺体験キャンプ。道具はレンタルもできるので、手ぶらでキャンプデビューはいかがだろうか



昨年9月には、新潟プロレスによるスペシャルマッチ「シン・ミズベリング」を開催。試合後は選手との記念写真などで盛り上がった（提供：株式会社シー・エス・シー 新潟プロレス）

神戸の港に緑豊かな丘をつくる

神戸港

# TOTTEI PARK



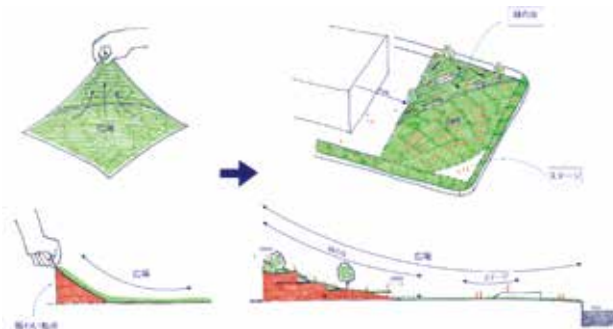
株式会社One Bright KOBE  
ベニューマネジメントDivision  
マネージャー

渋谷 樹 Itsuki Shibuya

OTTEIで創出された賑わいが街に染み出していくことを想定しています」。そうした意識が行政とOBK、設計者、施工者の間で最初から共有されていたと渋谷氏は振り返る。

緑の丘の設計は、神戸を拠点に斬新な建築を手掛けてきた畑友洋氏に依頼。緑化空間全体を一枚のピクニックシートに見立て、その一部を「つまみ上げる」ことで「丘」を構築

する。屋根部には植栽が施され、まさに緑に包まれた展望エリア、イベントの際には客席のように利用できる。S造二階建て、飲食を楽しめる商業施設も擁する。渋谷氏は次のように話す。「その独特のデザインか



緑の丘に立つと港と六甲の山並みが地続きのように感じられる。その海と山の景観こそがこの水辺の財産だ。「屋根に上ると海の上に立つていような感覚になります。立地的には間違いなく唯一無二の親水空間。ニューヨークの水辺を視察した際のロケーションを参考にしています」と渋谷氏は語る。視察に訪れたニューヨークの水辺では海を挟んで対岸にマンハッタンの風景が広がっていた。足元にはステージが配されライブなどのイベントが日常的に開催されている。広々とした砂浜で水平線を望む眺望とは違った海辺の魅力があったという。「自由の女神が最も美しく見えるビューポ

## 海と山、街を 緑の丘でつなぐ

ら、施工者からは難しすぎると言われてました（笑）。それでもシンボルと明言できる丘ができた。TOTTEIの年間動員目標は三〇〇万人ですが、その魅力を皆さんに知っていただければ決して不可能な数字ではありません」と自信を見せた。

## 高度成長期を支えた港の 新しいカタチ

日本の港は明治期の文明開化とともに世界に開かれた。そして高度成長期に港湾は目覚ましい発展を遂げる。港湾機能は今にいたっても高度化、多様化を続けており、その過程で港湾の風景は変わりつつある。およそ一五〇年の歴史を誇る神戸港も例外ではない。荷役の舞台としての役割を終えた新港第二突堤で新たな神戸港の姿を体現する水辺の緑地がこの春オープンした。

その名も「TOTTEI PARK」。二〇二二年の港湾法の改正に伴い港湾緑地などにおいて官民を挙げて港の賑わい空間を創出する



4月に開業を迎えたTOTTEI。記念イベントは大勢の人で賑わった（撮影：西山芳一）

べく創設された制度「みなと緑地PPP」を活用した第一号案件だ。神戸市に対し整備計画を提案し二〇二四年に認定事業者となったのが(株)One Bright KOBE（OBK）だ。同社は第二突堤において約一万人を収容する「GLION ARENA KOBE」を先行して整備していた。B.LEAGUEのプロバスケットボールクラブ「神戸ストークス」のホームゲームやコンサートに活用される次世代型アリーナだ。これと港湾緑地となるTOTTEI PARK、飲食施設を一体として開発し相乗的により賑わいのある港湾空間「TOTTEI」を構築するというコンセプトが高い評価を得た。アリーナに隣接する緑地には屋外イベントに対応する「緑の丘」と名付けられたシンボリックな施設が建設された。

この緑の丘のコンセプトについてOBKの渋谷樹氏に伺った。「アリーナに隣接する突堤の先端エリアにイベント開催を軸とした施設の整備を計画しました。アリーナで試合などが開催されていないくても年間を通して日常的に市民が集い、T

イントを計算して水辺が設計されていきました。これは神戸でも実現できると。街並みを通して六甲山が身近に体感でき、南西方面にはポートタワーやメリケンパーク。一千万ドルの夜景ともいわれる絶景も含め『ザ神戸』のロケーションを堪能できると自負しています」。借景を最大限に生かし、水辺の景観と融合する。それがTOTTEIの大きな魅力になる。

ハードの整備だけではなくDXによる持続的な賑わいの創出にもチャレンジする。TOTTEI KOBE公式アプリにはイベントやキャンペーンの情報、チケットの購入、特典のクーポンなど盛りだくさんのコンテンツを用意した。「多彩なイベントを企画・展開していく予定です。アプリを通して市民や来街者の皆さんにリピーターとなっていたきたい。TOTTEIや神戸の体験を充実させるアプリです」と渋谷氏は話す。

## 震災から三〇年を経て

今年、神戸は阪神・淡路大震災



兵庫県出身の畑氏。高校生で阪神・淡路大震災を経験し、神戸のまちに何ができるのかを考え続けていたと言う。TOTTEIは、その一つの答えとなった(撮影：中原一隆)



イタリア・シチリア島タオルミーナの古代ギリシャ劇場



設計図を元につくられた仮想現実(提供：畑友洋建築設計事務所)

とはあまりなかった。でも、神戸が世界に冠たる港湾都市として発展してきたことは事実です。TOTTEIが整備されることでその海が人に返ってくる。ここから新たな神戸港の歴史が紡が

探っていった。隣接するアリーナからの眺望も尊重し、全体の景観への干渉も回避するため、設計図を3Dデータに出力し、神戸の景観データと連動させて仮想現実のなかで風景を検証した。自ずと緑の丘は鉄骨が放射状に広がり、緩やかな曲面を擁する複雑な構造になってしまったと畑氏は笑う。「設計、建築のプロセスで涙ぐましい努力がありました(笑)。それでもこの丘を造る意義と価値をクライアントであるOBKや施工者を含めた全員が自覚し

ていて、そこだけは最後までブレなかった。感謝しています」と畑氏は振り返る。

神戸の市民にとってエキゾチックな街並みとその背景にある六甲の山並みが最強の観光資源だが、市民と港湾、水辺とは意外と距離があるのではないかと畑氏は見ている。「神戸港はコンテナ港ですから、その物流拠点だった突堤を親水空間と捉えるこ

### 海が人に返ってくる

れていくのだと思います」。その過程で緑の丘も思いもよらない成長、進化を見せてくれるのではないかと願っていると畑氏はこう言葉をつないだ。「子どもが落としたドングリや鳥たちが運んできた種子が緑の丘で芽吹き想定を超えた植生が生まれることもあるかもしれません。一〇年、二〇年と時を経るなかでどんどん変わっていくってほしいです。緑の丘を豊かな水辺にしていくなのはここを訪れ、活用する皆さんです」。

畑氏には水辺を象徴するビジュアルがあると言う。新印象派の画家スーラが描いた水辺の風景だ。「川か湖のたもとに貴族層から市井の人々まで多くの人たちが集い木陰で寛いでいる情景です。ただそこで静かに水面を眺めている。集まった人たちはたぶん他人同士。水辺には人間のある意味そうした都市的な、一方で本能に根差した営みを喚起する力があるように思います」。神戸の水辺もそうあってほしいという希望が設計の背景にあったと言って穏やかな笑みを見せた。神戸の港で海と緑の丘が新しい水辺を醸成していく。



神戸の発展を100年以上支えた突堤としての名前を継承し、中核施設「GLION ARENA KOBE」を含む新港第2突堤全体のエリア名称が「TOTTEI (トッテイ)」に決定した

から三〇年の節目を迎えた。渋谷氏は神戸港の新たなシンボルTOTTEIに対する市民の期待度はとても高いと話す。「神戸は着実に復興を果たしてきました。一方で震災前の神戸の勢いを知っている方々のお話をお聞きすると、もしかしたら一〇〇%の達成感、満足感は得られていないのではないかと感じることはありません。だからこそ港の勢いを取り戻そうとするTOTTEIに大きな期待感を持つておられる。震災時私は〇歳でしたが、期待とともに

### 都市軸の起終点となる港の要衝

「神戸には南北に走る明確な都市軸があります。北側の新神戸駅、三宮から南の新港第二突堤まで。この二つの起終点からなる都市構造を理解したうえで緑の丘がどうあるべきかを常に念頭において設計に臨みました」と語るのは建築家畑友洋氏だ。山と海、そして街を連続的につないで広がりのある都市空間を創造する。「点」としての施設ではなく都市軸という「線」から街や海といった「面」に波及する建築物を目指したという。

「神戸には南北に走る明確な都市軸があります。北側の新神戸駅、三宮から南の新港第二突堤まで。この二つの起終点からなる都市構造を理解したうえで緑の丘がどうあるべきかを常に念頭において設計に臨みました」と語るのは建築家畑友洋氏だ。山と海、そして街を連続的につないで広がりのある都市空間を創造する。「点」としての施設ではなく都市軸という「線」から街や海といった「面」に波及する建築物を目指したという。



株式会社畑友洋建築設計事務所 代表

畑 友洋 Tomohiro Hata



撮影：中原一隆